

幸運の黒子

海野十三

青空文庫

「どうして、おれはこう不運なんだろう」

病院の門を出ると、こら 恠えこらえた鬱憤うっぶんをアスファルトの路面ただに叩きつけた月田半平つきだはんぺいだった。

院長は、なーに大丈夫ですよ、こんな病気なら注射の五十本もやれば造作なく治りますよ。ただし五十本が一本欠けても駄目ですよ、それをお忘れのないように——と言った。一回三円として、百五十円の金があるわけだ。ああ、これがたった一度の代償なんだ。

たった一度——というのは、すこし説明を要するが、この半平は元来、貞操堅固の男だったのを友人達が引つ張り出して、東都

名物の私娼窟玉の井へ連れていったのだった。これは友人にも多少の悪巧みはあつたにしても、主たる動機は半平という男が細君に死別してからまる二年この方、空閨を貞淑に守りつづけているのを見ちやいられなかつたせいだつた。そして半平は、あくまでも亡妻への貞操を死守するつもりだつたのである。彼のエネルギツシユな敵娼の理解を得ることができず、ついに暴力をもつて征服されちまつたのである。

そして、数日後に半平は身体の一部に異常を発見したのだつた。彼にとつて、それは踏んだり蹴つたりの不運だつた。

いや、それよりも差し当たり大問題なのは、あと四十九回の治療代をどうして捻出すべきかということだつた。

これが五年前なら五千円の貯金があつた。その年の暮れ、三千円というものを費^{つか}つて新妻を持つた。その細君はさらに次の年に慢性病になり、転地療養をすることになって残額の二千円はばたばたとなくなつてしまつた。そして貯金通帳から、最後の五十銭までが奇麗に払い出されると、間もなく細君の寿命も、天国に回収されてしまつた。彼はまったく無一文になつたのだつた。

（四十九回の注射をやらなければ、この身がだんだん腐つていく！）

こうなると、半平は泣いてばかりもいられなかつた。

三日三晩考え抜いた揚句、やつとの思いで彼は案外手近に一つの案を発見したのだつた。

「どうだったね。貸してくれたかい」

半平は下宿の二階に待っていてくれた友人、かわはらこうたろう川原剛太郎の顔を見るが早いか、こう声をかけたのだった。その友人は××生命へ出ている男だった。

「うん、貸してくれたがね」

友人は煙草たばこの煙を忙せわしそうに喫すった。

「きみの言うほどは駄目だったよ」

「じゃ、いくら貸したい。二百円か」

「うんにや、その半分。百円だあ」

「ちえっ、百円ぽっちか、それじゃ治療代にも足りやしない」

半平は川原の××生命へ、一万円の保険を掛けているのだった。この際、払込金の一部を低利で貸してもらおうと思つて川原に交渉を頼んだのだったが、それが最高百円ではすつかり予想を裏切つてしまつた。

「どうも気の毒だがね、どうにも仕様がな^いよ。これがきみの細君の保険だつたら、ここんどこできみは一万円の紙幣束^{さつたば}を掴^{つか}んでいるはずだつた」

「そういえば、なるほど。どうしておれはこう不運なんだろう！」
「不運とい^えば、思^い出^したがね」

友人の川原は改^まつた口調で語^りだした。

「神龍^{しんりゆう}子^{うし}という観相家の話を聞^きいたんだが、きみ、幸運^{こうん}の黒子^{くろし}」

というのがあるんだ。顔にできている黒子といえば普通、鼻筋を中心として左側にあるに決まっっていて、右側にあるのは非常に稀まれなんだそうだ。そう言われて気をつけて人の顔を見ると、なるほど顔の黒子はみな左側にあるね。ところで、右側に黒子のある人間が全然いないかというところ、そうでもないのだ。極めて稀だが、あるにはある。そして右側に黒子のある人はたいへん幸運なんだそうだよ。きみもいつまでも鰥夫やもめでいずに、今度は幸運の黒子のある若い女でも探し当てて再婚してはどうかね」

たいへん耳寄りな話だった。

自分の顔に幸運の黒子を植えつけるわけにはいかないが、鮮やかな幸運の黒子を持つ若い女を女房に持てば相当運が向いてくる

だろう。

「そりや本当かい」

半平は問い返さずにはいられなかった。

「神龍子の言うことだもの、絶対に信用が置けるさ」

友人は半平の懷疑を嘲あざけるように言った。

「それでも、五分間ほどこのまま安静にしてください」

院長は注射器とアンプルの殻とを、看護婦に手渡しながら言った。

「最初のうちは、どうしても注射の反応は強いですよ。まだ二回目だからな。では、お静かに」

そう言つて、院長は部屋を出ていった。あとには看護婦が残つて、手術器械をカチャカチャと片づけているばかりだった。

「あ、そんなに——」

とんきよう頓 狂な声を上げて、看護婦が飛んできた。

「お動きになつてはいけません。痛みますか。もし……」

目を閉じていた半平の顔のあたりに、若い女の体臭がむんむん匂におつてきた。彼は昂こうふん奮で締めつけられるようだった。狡ずるく目を閉じたまま、嗅きゆう覚かくで若い看護婦の全身を舐なめまわしている半平であつた。

「声を出しちや、いけませんよ」

看護婦の熱い呼吸いきがいきなり半平の耳もとでしたかと思うと、

彼の一方の手首はぎゅつと握られてしまった。

「これを、あとでお読みになつてください！」

「?!」

半平はこの意外に驚いて、看護婦の顔を見上げた。

「おお……」

彼はもう少しで大声を出すところだった。逃げるように急ぎ足で部屋を出ていくその看護婦の肉づきのいい顎あごの右側に、黒大豆をそつと貼はりつけたような黒子が明らかに認められた。おお、幸運の黒子！

往来へ出ると、半平は若い看護婦から掌てのうちに握らされたいくつにも折り畳まれてある紙片を開いてみた。そこには鉛筆の走

り書きで、こんな文面が認めしたたられてあつた。

『失礼ごめんあそばせ。病院で一回三円かかる注射を、あたしの下宿へ午前八時二十分までにおいでくだせれば半額でいたします。

小石川区××町つぼみアパート七号室

唐崎からさきみどり』

半平の顔が、だらしなく解けた。行人の巷ちまたに曝さらすのが苦しいにこにこ顔だつた。

（幸運の黒子を持った女をひと目見ただけで、こつとも運がよくなるものか！）

注射料は半額で済むことにはなるし、幸運に恵まれた若い女は

探し当てるし、それに、あの唐崎さんという看護婦の素晴らしい性感はどうだ！

彼はすぐにも飛んで帰って、唐崎さんと握手をしたくてたまらなかつた。

筋書どおりに、唐崎さんといつしか同棲どうせいするようになった半平だつた。新婚旅行も唐崎さん——ではない新妻みどりの稼たぎ貯めた財布のお陰で南伊豆みなみいずまで遠出をし、温泉気分と夫婦生活とを満喫することができた。

だが、東京に帰つてくると半平は重病になつて、どつと床に就いてしまった。高熱がいつまでも下がらなかつた。食物もろくろ

く口へ入らなくなつて、とうとう新婚後三十日と経たたないのに、

「ななな、何が幸運の黒子だ！」

と呻うなりながら、半平は鬼籍に入つてしまつたのだつた。哀れな半平だつた。

話はこれでおしまひである。

蛇足を加えるならば、半平の考えは間違つていた。幸運の黒子は、やっぱり幸運の黒子だつた。なぜなら半平の死とともに、一カ月で未亡人になつたみどりは××生命から現金で金一万円也を受け取つた。それが亡夫の掛けていた生命保険だつたことは、読者諸君のよく承知のところである。

幸運の黒子はみどりにあったので、半平にあるのではなかった。
半平の認識不足が、この物語を生んだのだった。

青空文庫情報

底本：「赤外線男 他6編」春陽文庫、春陽堂書店

1996（平成8）年4月10日初版発行

入力：大野晋

校正：しず

2000年2月26日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

幸運の黒子

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>